

〔段注說文解字^{米七上}〕粉所以傅面者也（中略）小徐曰古傳面亦用米粉故齊民要術有傅面粉英按據

面者凡外曰面周禮傳於餌齋之上者是也引伸爲凡細末之稱

〔釋名^{四首飾}〕粉分也研米使分散也

〔中華古今注^中〕粉

自三代以鉛爲粉秦穆公女弄玉有容德感僊人簫史爲燒水銀作粉與塗亦名飛雲丹傳以簫曲終而同上昇

〔類聚名義抄^{七米}〕粉音忿 シロキ物 白粉 ハフニ

〔新猿樂記〕第一本妻者齡既六十而紅顏漸衰○中戀慕之淚洗面上粉愁歎之炎焦肝中朱○中

十三娘者中之糟糠也醜陋不可見人○中施粉似狐面著經猶猿尻

〔東雅^{器入}〕粉讀てシロキモノといひ又白粉の字を出して讀みてハフニといふハフニとは白粉

の字の音の轉也シロキモノとは今俗にオシロイといふ也白粉の字萬葉集にはシラニニといふなりニとは彩色をいひしは丹色をのみいひしにはあらず白色をもとは今俗にはオシロイといふもの即是也

〔倭訓栞^{中編二十}〕ばふに 和名抄に白粉をよめりはふは白粉の音には丹の義なるべしすべて

彩色をにといふなりと

〔安齋隨筆^{前編二}〕一はふに○中貞丈云はふには白粉也俗にいふおしろい也

〔枕草子^九〕からぎぬに。まろいものうつりて。まだらにならんかし。

〔榮花物語^{十六}〕かほには。まろいものをつけたらんやうなり。

〔運歩色葉集^連〕白物 白粉

〔嫩入記〕よめ入の條々

一手ばこの中に、小ばこ四つあり、その内に入物一にはおしろい、一にはたうのつち○下